

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議石垣・埋蔵文化財部会（第52回）

議事録

日時 令和4年11月18日（金）14:00～16:00
場所 名古屋市能楽堂 会議室

出席者 構成員
北垣 聡一郎 石川県金沢城調査研究所名誉所長 座長
赤羽 一郎 前名古屋市文化財調査委員会委員長・
元愛知淑徳大学非常勤講師 副座長
宮武 正登 佐賀大学教授
梶原 義実 名古屋大学大学院教授

オブザーバー
山内 良祐 愛知県民文化局文化部文化芸術課文化財室

事務局
観光文化交流局名古屋城総合事務所
教育委員会生涯学習部文化財保護室

議題 (1) 不明門北土橋石垣根石発掘調査について
(2) 天守台穴蔵石垣試掘追加調査等の調査成果について

配布資料 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 石垣・埋蔵文化財部会
(第52回) 資料

事務局	<p>1 開会</p> <p>2 あいさつ 本日は、大変ご多用の中、石垣・埋蔵文化財部会にご出席いただき、ありがとうございます。本日取り上げさせていただきますのは、不明門北土橋石垣根石発掘調査はじめ、4題です。11月も後半になり、残すところ今年もあと1か月少しということで、年度内の我々の関連事業も、いよいよ大詰めを迎えています。本日ご議論いただく各テーマについては、一つひとつ大変重要な課題です。委員の皆様方のご助言をいただきながら、今年度できる限り進捗が見えるように、取り組んでいきたいと考えています。忌憚のないご意見を積極的にいただきたいと思います。限られた時間ではありますが、どうぞよろしく願いいたします。</p> <p>3 構成員、オブザーバー、事務局の紹介</p> <p>4 本日の会議の内容 資料の確認をいたします。会議次第、出席者名簿、座席表が各1枚ずつです。会議資料として、1から4まであります。資料番号については、右肩に表示しています。ページ数については、ページの下部に記載しています。具体的には、資料の1がA4で3ページになります。資料2は、A3で3ページの後に1枚、最終ページだけA4版で付けています。資料3については、A3で4枚です。最後に、資料4については、A3で6ページです。 では、本日の議事に移ります。ここからの進行は座長に一任したいと思います。北垣座長よろしく願いいたします</p>
	<p>5 議事</p> <p>(1) 不明門北土橋石垣根石発掘調査について</p>
北垣座長	まず議題の件につきまして、事務局から説明をいたします。
事務局	議事の1つ目としてお諮りするの、不明門北土橋石垣根石発掘調査についてです。資料がA4で3ページあります。まず、位置をご説明します。資料の3ページ目をご覧ください。天守の北側の不明門を抜けて、御深井丸に出るところに土橋があり、これは西側の面になります。赤い四角が設定のところ。名古屋城においては、現在天守台周辺石垣の現状把握、安定性の確認といった調査を継続的に行っています。今年3月の石垣・埋蔵文化財部会においては、天守台西側の鵜の首と通称していますが、狭くなった部分の石垣について、根石等の調査を行う現状確認と安定性の調査を行ったほうが良いというご

	<p>助言がありました。それを受け、そちらの調査については、現在文化庁に現状変更申請を提出しています。ご許可いただき次第、調査にかかりたいと思っています。ご指摘も参考にし、鶯の首と同じような条件で、狭くなっているところについて、安定性や現況を確認しておく必要があると思い、今回お諮りするのには、その部分の発掘調査にあたります。</p> <p>土橋の西側と東側、両側に石垣面があります。東側の面については、これまで観察を進めてきたところ、間詰石の抜けなどが観察できましたが、それほど状態が悪くないのではないかと判断しました。今回、西側の面についての発掘調査を計画しています。西側の面のオルソ写真をご覧ください。土橋のところのオルソ写真になります。濃尾地震の記録などによると、ここが濃尾地震のときに崩壊しており、積み替えたことを確認しています。現在の石垣面そのものについては、それほど間詰が抜けている、石垣が緩んでいるというところはありません。これまでの調査の知見などから考えると、濃尾地震等の明治以降の積み直し部分と、そこの下、おそらく地下部分については、江戸時代の根石が遺っているのではないかと考えています。その部分のすり合わせというか、その境界部分の関係などが、あまり状態がよくないのではないかとということも想定されます。なおかつこの部分については、来場者の方の1番の通路になります。そういったことを勘案して、地下部分、積み替えられた部分と、本来の部分が残っているとしたら、その部分の境目の状況、特に根石の状況を確認するという目的で、調査区を設定したいと考えております。</p> <p>具体的には資料の3ページ目でお示した、赤い四角部分で、石垣の前面で、根石、現在の石垣の面に接するようなかたちで、南北4メートル、東西3メートルの調査区を設定し、発掘調査を行いたいと考えています。調査の方法については、資料の2ページ目をご覧ください。これまで内堀内で行ってきた調査と同様に、手掘を基本に掘り進め、特に包含層以下の掘削に際しては、今回の調査目的の達成のために必要最小限の調査を行う計画です。埋め戻しの方法については、これまでと同様、安全性に配慮して埋め戻していくことを考えています。</p> <p>簡単ではありますが、今回計画している調査については、そのような調査を考えています。日程的にはかなり厳しいかと思っています。本日ご議論いただき、お認めいただけたら、現状変更申請の手続きへ移らせていただき、なんとか年度内に調査を進めたい、調査を終えたいと考えています。</p>
北垣座長	<p>事務局より説明がありましたので、その件について、ご意見等をいただきたいと思います。日程的には大変厳しいという中で調査ですが、とにかく年度内にはやりたいというお話ですね。ご意見をいただきたいと思います。お願いいたします。</p>
宮武構成員	<p>最初に質問させてください。この中で過去に実施したレーダー探査の結果からは情報を得られなかった、って書き方ですが。反応はなかったのですか。</p>

事務局	<p>スクリーンに、レーダー探査の結果をお示しします。</p> <p>これがレーダー探査の結果です。石垣面については、下段のところまではレーダーが行っています。今回調査しているのが、前の図の、断面図の左側のほうの石垣面にあたります。この部分の地面のところはレーダー探査が及んでおりません。根石の状況がわかっていないということと、石垣面のレーダー探査では、根石まで当然いけていませんので、根石についての情報は、今のところないということです。</p>
宮武構成員	こっちの面ではなくて、こっちの面ですよ。
事務局	はい、そうです。
宮武構成員	これは東側ですよ。
事務局	そうです。
宮武構成員	東側のここに略図的に石垣のラインがありますけど、これは反応があったのですか。
事務局	具体的な反応というわけではなくて、想定です。
宮武構成員	こっちはまったく反応が出なかった。出なかったっていうのか、かかなかったのですか。
事務局	そちら側については、今回まだやっていません。
宮武構成員	微妙なのは、やったんだけど反応しなかったっていうのであれば、これは水がきているから、もう1回やってもダメなんです。そうではなく、やれば反応するんであれば、やったら白くなりますけど。
事務局	そちらについては、今回レーダーはかけていません。石垣の前面についてはかけていないので、反応があるかどうかはわかりません。
宮武構成員	単純に、その対象にはしていなかったということですね
事務局	レーダー探査をやった時点で対象にしていませんでした。
宮武構成員	これで見る限りは、内部は盛土ですか。芯があるのですか。
事務局	左側の実際の反応の図では、なかなか読みにくいということ、実際に分析を担当したところからも聞いています。総栗の可能性もあるし、真ん中になんらか、土砂混じりの土がある可能性もあるというような反応だと聞いています。

宮武構成員	<p>あいまいな書き方をしているので、調査の目的をはっきりさせたほうがいいと思います。現状変更の意味でも。土橋石垣の安定性の検討と書いてありますが、根拠はそうではなく、土橋そのものが安定しているかどうかの問題だと思うんですよ。極端な話、石垣が崩れても上の土橋が無事だったらいいわけですから。土橋自体が無事であるかどうかというところが主題でないと、まずい話だと思います。外側の東側の石垣を見ると、石垣の状態の標準断面などを見ると、安定しているように私は見たんですよ。上がつぼんでいるんですよ。上端部が内側につぼんでいる状態で、巾着を絞るような状態です。よくありがちなのが、上のここの部分の断面を見ると、上の部分の裏栗層ですから、本来の部分が下に落ち込んでしまって、内側に総栗という典型的な現象です。上だけの問題で下は堅牢だということも、言えるかもしれない。</p> <p>今回テーマにしている、こっちを掘りたいというのは、明らかに濃尾地震で1回崩れた、ないしは致命的なダメージがあった。ここから上はぜんぶ積み替えているから一見堅牢そうですけども、一度えらいことになっている経験を持っている。なので、こちら側を調べることは妥当だと思います。問題は、こちら側が離れているから土橋自体がどうなのか、というのは違うと思います。データとしてもう1回解析をチェックしてもらって、中が安定している、わりと密な状態で、盛土にしても、地山の残り部分にしても、しっかりしているのであれば、変な話、石垣が崩れても深刻な問題にはならないです。問題は、この状況を見たいですけど、このレーダーの、ここを検討するのにやったほうがいいのか。</p> <p>鵜の首が決定的に違うのは、鵜の首自体が台地の縁辺側のへりのぎりぎりなので、本当に外側がなにもない不安定な状態の、土橋なんです。これは、台地の内部の状況の中の堀をえぐって造っている土橋ですから、そうすると、堀の上のとの間で、地山の状況が残っている可能性があります。全然安定性が高いのであれば、石垣の根石まわりの状況を見るだけですむので。意外とレーダー探査の結果というのは、もう一回吟味したほうが、本来の調査の目的を達するためには重要だと思います。</p> <p>それと確認です。確か、私の記憶では、一番最初に天守台のまわりを調査したときに、3ページの図をだしてください。ここのあたり（天守台の北東隅？）を掘っていませんでしたか。ここの入隅のところ。</p>
事務局	<p>最初のときに、そこの付近と、もう一つ天守台の北東のコーナー部分の2か所を掘っています。</p>
宮武構成員	<p>確か、この角の入隅を掘っているでしょ。</p>
事務局	<p>はい。</p>
宮武構成員	<p>この位置によっては、ここを横断するかたちで土層がでできますよね。それにあわせるかたちで、トレンチを入れたほうがいいと思います。</p>
事務局	<p>わかりました。</p>

宮武構成員	<p>問題は、こちら側の入隅かどっちかのトレンチの、南壁か、北壁の土層が生きているところ。それと位置をあわせるようにトレンチをいれたほうが良いと思いますけどね。</p> <p>一番見るべきところは、濃尾地震で崩壊、または致命的な積み替えをやってしまった、地面から上の石垣の形状とは違うものがある。下に遺っていて。それがきちんとつながっていればいいですけど、場合によっては外側にでてしまっている。変なふうになって、不安定になっている可能性があります。</p> <p>課題としては、石垣の面自体の安定性を探る一方で、土橋自体が安定しているかどうか、2本立てで明確にしておかないと、合わず足らずになってしまうので、そこらへんを整理されたほうが良いと思います。</p>
事務局	土橋のほうは、1回堀を完全に掘ったあとに埋めて造っている土橋だと思います。そのへんも含めて、データの精査も含めて検討したいと思います。
北垣座長	ほかには、ありませんか。赤羽先生、お願いします。
赤羽副座長	宮武先生のお話と、ちょっと関係しますけども。すでに内堀の調査のときに、さらに調査をやっているわけです。その結果に基づいて、今回の調査区の設定は、南北4m、東西3mは、前回の調査とだぶらない範囲で設定しているわけですか。
事務局	はい。
赤羽副座長	それでしたら、計画図面の中に、前回以前の発掘調査区を含めて、設定した場所をきちんと明記すべきだと思います。それで、3m×4mの調査区を設定したということがわかるんですよ。今まで掘った部分と、これから掘る部分の位置関係だけではなく、遺構の関係性というのも重要になってくるので。調査区は、計画図面にはっきり記すべきだと思います。
事務局	今回、こちらの調査区を設定した際に、こちら側の関係というよりは、先ほどお示ししたレーダー探査の測線のところに調査区を設定するほうが良いかと思い、そちらを優先に考えていました。こちらまで十分考えが及んでいませんでした。申し訳ありませんでした。
北垣座長	<p>ほかに、ありますか。</p> <p>今の議論もそうですけど、構造体ですから。そのあたりを常に気にしておかないといけないかなと。もう少し効率的な仕方があるのではないかというご意見です。一つこれから、よろしくお願いします。</p>
事務局	検討するところは検討して、先生方にご報告させていただきます。
北垣座長	いかがでしょうか。梶原先生、ありませんか。

梶原構成員	特にありません。以前のトレンチよりも少し広めにあげていただいて、そのほうがいいかなと思いました。
北垣座長	この位置については、ご意見がだいたいでたように思われます。これは、次の全体整備検討会議で報告していただくということで、よろしいですか。
全員	同意。
北垣座長	そういうことで、よろしく願います。 それでは、続いて議題の(2)天守台穴蔵石垣試掘追加調査等の調査成果について、事務局よりご報告をお願いします。
	(2) 天守台穴蔵石垣試掘追加調査等の調査成果について
事務局	<p>資料2をご覧ください。初めに、天守台穴蔵石垣および橋台試掘調査成果について、ご説明します。本調査は、昨年度から継続して実施しているものです。図1のとおり、天守閣内に9つの調査区を設定し、調査を行いました。今年度は、①⑨の2つの調査区について調査を行いましたので、その成果をご説明します。</p> <p>初めに天守台穴蔵石垣、図1で①と示した箇所では、昨年度から引き続き調査を行っています。図2のとおり、穴蔵石垣の下に、昨年度は②から④の石材を検出しました。しかし、当初の調査区範囲では、その性格等が十分に把握できなかったため、図2の点線範囲において調査区を拡張しました。その結果として、石列の延長、①と⑤の石材2つを確認しました。調査区の北側において、石列が良好に残存していることを確認しました。石列上には、図2、3のとおり石垣が確認されています。この石垣に貼りついていたモルタル等を除去し、その時期を精査したところ、図3にお示ししているとおおり、調査区西側の白線部分内で、石垣の下から天守閣再建時の工事土等が確認されました。調査区の中央部分では、工事土は確認できていませんが、築石の形状や据え方等の特質が近世と異なることから、この土砂については現代に積み直された石垣と考えています。一方で、図3の点線内で示した石垣については、築石の大きさや積み方が異なることから、近世に遡る可能性も考えています。</p> <p>本調査の課題として、先ほどのご説明のとおり、穴蔵石垣では近世に遡ると考えられる石列を検出しましたが、その上部の石垣の時期が一部確定できていない状況です。調査区東側については、近世段階の可能性のある石垣も存在しますが、その石垣との連続性も確認できていません。この点に関する対応については、後ほどご説明します。</p> <p>続いて、橋台の調査成果について、ご説明します。⑨番の調査区になります。橋台は、図4のとおり、ボックスカルバートが設置されている橋台中央を残し、橋台の東西部分を掘削しました。調査区全体で、大規模な現代の攪乱が検出されたものの、攪乱の及ばない範囲では、現在の層面の直下に、土の特徴から近世の盛土と判断されている土層が、図5のとおり、石垣から橋台の中央に向かって下降するかたちで確認しています。調査区東側面では、図6のとおり、石垣の築石等を検出しています。築石が近世の盛土に埋もれていることから、近世に</p>

築造されたものと考えています。この石垣の前面には、根石とともに固められた前押さえ捨石と考える遺構も検出しています。

続いて、天守台穴蔵石垣背面調査の調査成果について、ご説明します。穴蔵石垣は、戦後の積み直し、現天守閣再建時等に、大きく改変されていることがわかっています。穴蔵石垣背面での、天守台穴蔵石垣の今後の修復、整備の方針当を検討するため、また遺構の残存状況、石垣の安定性等の確認を目的とした発掘調査を実施しました。調査区は、図7にお示ししたとおり、3か所を設定しています。

この調査成果について、簡単にご説明すると、天守台北東の①番で行った調査では、図8のとおり、掘削したところ再建時の工事土の堆積が確認されました。図9でお示ししたとおり、調査区東側では築石の石尻を確認しました。

続いて天守台北中央の②調査区では、①番の調査区で、再建時の工事土を確認しました。図11です。1mほど掘削しましたが、その範囲内では工事土を確認しています。調査区北側では、図12のとおり天端石の石尻を確認しています。

続いて③の調査区です。図13のとおり、調査区南西隅で戦後の石垣積み替え工事の際の三和土面が残存しており、それ以外は再建時に改変を受けた状況になっていました。この調査区についても、図14のとおり調査区の西側で天端石の石尻を確認しています。

以上を基に、天守台石垣の背面について3か所の調査を行いました。が、調査目的である遺構の残存状況の確認等は、今回はできませんでした。ただ、これ以上の掘削は安全上困難なので、現状ではやむを得ないと考えています。

以上、2つの調査について整理しまとめると、まず天守台穴蔵石垣試掘調査では、調査区の拡張により石列を確認しましたが、石列上の石垣の時期については一部確定できていない状況です。

次に橋台試掘調査、⑨番については、現代の攪乱の範囲外で近世盛土、石垣、その前面で捨石等を確認しました。大天守、小天守同様に、石垣の下部が残存している状況です。天守台穴蔵石垣背面調査については、各調査区で約70cmから1m掘削しましたが、その範囲内では天守閣再建時の工事土の堆積のようなものを確認しています。近世の栗石層、または現天守再建時の仮設土留め等は確認できませんでした。各調査区では、先ほどご説明したとおり、天端石の石尻を検出しているので、今後控え長を計測し、前回実施した天守台石垣のレーダー測定の結果と比較したいと考えています。今回の調査については、再建時の工事土等のみを検出した状況であったため、当初計画していた栗石の密度試験等を行わないことを考えています。

天守台穴蔵石垣の追加調査について、ご説明します。先ほどご説明したとおり、穴蔵石垣の一部については時期を特定できていません。また、それらと検出された石列との関係も明らかでないので、図15のとおり、調査区の拡張を考えています。現在お示しした資料では、幅が1.5m×1.3mとしています。現在の石垣面の調査、当時の施工写真等と比較し、その精査を行っています。その調査の成果次第によって、範囲を確定したいと考えています。この1.5mを超えて調査を行う可能性もあります。これによって、石列の石垣の時期を確定するための調査を行いたいと考えています。

北垣座長	現在の調査のまとめということで、1、2、3、4というところで、まとめられています。それでは、ご意見等を伺いたいと思いますので、よろしくをお願いします。
事務局	追加でご説明させていただきます。石垣面のオルソ写真をご覧ください。今のご説明で、ここまで拡張する予定にしていますが、最近の検討で、このへんの石垣が工事中に取り外された部分と、残っている部分があることがわかってきました。これについては確実に外れている写真がありますので、確実に外れている部分と残っている部分を正確に把握するために、現地でもう少し広げたほうがいいのかということを検討していることを、先ほど最後にお話ししました。今日の資料は1.5mで書いていますが、現実的には2mくらいに広げて、このへんの外れている石垣と残っている石垣の関係を、外れて積み直した石垣、そこをしっかりと把握する計画に直してはどうかと、今考えています。
宮武構成員	ここらへんの不安定というか、はっきり判別の材料として怪しいもの、これが一番怪しいわけですよ。ここまで広げるのが確実だと思います。前から見ると、ちょっとこういうの、首をかしげるんですね。近世ばいんだけど、置き方と組み方は、確かに万全ではない。このあたりなら安心できるから、このつながりをはっきりしておきたい、ということだと思います。
北垣座長	<p>報告に対して、新たなところの追加の部分を出されています。私も現場でそういうことを、話したかわかりませんが。こういった状況が現在はできてきているということです。現場はとにかく、ここに入るのが大変です。当然頭は、上に上がりませんから、這っていくような感じですよ。非常に空気の悪い状況の中で、調査を進めていただいているということですけども。</p> <p>いかがでしょうか。このあたりについて、これだけではないですけど、最初の調査のまとめのところからが範囲ですので、どこからでも結構です。ご意見等がありましたら、お願いしたいと思います。</p> <p>ご参考までに、1 ページに図3が挙がっています。穴蔵石垣前面の状況、南西からとなっていますけど。この部分が、今最後に出されたその図が、その先端にあたるわけですよ。なかなか現場に入ることができないので、現状としては調査の方法、担当としては、ここまで入って調査をやられているという、その説明ですよ。図3のさらに、右手奥がこの状態、ということですよ。</p>
事務局	はい、そのとおりです。
北垣座長	このあたりはなかなか入れないので、今、ここで初めて客観的に現状の残り部分を見せてもらっています。今お話のように、黒く塗ってあるこのあたりの石垣が、どんな形状をしているのかを参考にしたいなという、事務局のお話であったと思います。これからの確認が、さらに必要になってくるということですね。

事務局	そのとおりです。
宮武構成員	<p>座長からお話がありましたとおり、城郭の調査で、これだけ劣悪な環境の中での調査というのは、あまり例がないわけです。例がないから、ここまで細かい層序や切り合いなどで判別を繰り返してこられた調査整備は、本当に敬意を表したいと思います。私だったら、放り捨てていますもん。そこまでして、今どの段階まで見えてきたかという、従来から天守台の穴蔵については、遺構は既に存在しないと、削られたすべてなくなっている、という理解が強かった場面があったわけですが。やはり石垣・埋蔵文化財部会としては、そこは慎重に証明すべきという方針に沿って、ここまで細かく調査していただいたおかげで、実は意外と残っていたということが、ほぼ確定してきた。残っている部分についても、さらに名古屋市さんの慎重な姿勢がでているのが、今の段階での現状課題によると、まだ年代的な確定ができない部分があるから、これから調査していくというのは、本当に立派だと思えます。ただ、橋台から見させていただくと、層序という点でいったら、もう動かないだろうと。構造物としての盛土の構成体として天守台に線を沿わせた図がありますから。そこで使われている層序の順番からいえばこれは、時期的な不明の云々は年代問題ではなくて、当初の名古屋城時代のものだというのが、おおよそ見えてきた。</p> <p>あとはトレンチ調査ですから、穴蔵全体でどこまでそれが残っているかという判定は難しいですけれども。この会議の命題である、これからの天守台をどう扱うかという課題では、はっきりとまではいかないけど、なんらかを得なければという思いの部分ですよね。橋台の部分で気になっていたんですけど、石垣が残っているということだけではなくて、図5、図4に写っているように、現況の側溝自体の、もともとあった側溝を外して組み直したと、設計上ではなっているようですが、現場で見ると花崗岩なんですよね。ところが、大天守台の入口のトレンチで見つかっている、本物石組み側溝は、凝灰岩系ですから、違うものなんですよ。組み外したのではなくて、あとで載せたもので、ひょっとしたら、この下に本物が残っているのではないかと思います。埋め殺しているだけで、下から天守台の入口のところで残っている石組みの延長部分の部位が残っている可能性が、多分あるのではないかと思います。それくらい、この下の土層というのは、よく残っています。ボックスカルバートがくり抜いた状態と、左右の残存している、本当に狭い範囲の中で、よく層序を丁寧に見て、ここまで判断されたなど、本当にすごく感心しています。こういうふうには丹念に見ていると、まだ残っているのが相当ありそうだといいかたちで、とりあえずトレンチでやれることは済ませていこうということで、その方針は維持して、進めていただいて結構と思います。</p> <p>1点、確認です。図8、図9で現れているように、天守台そのものの裏栗の状況を調査していただいて、背面調査の結果として、密度計算をしないとありましたが、どうしてですか。</p>
事務局	<p>現在検出されているものについては、図8でお示ししているとおり、栗石というよりは工事の廃土というか、そういった土がでてきている状態で、栗石とは認めがたいものでしたので。</p>

宮武構成員	<p>なるほどね。別の視点だったんです。私が見ていたのは、これは、やっておいたほうがいいのかではないですか。これはどう見ても、名古屋城のオリジナルの裏栗ではないです。ないのが、これほど広範囲に残っているということに、危うさを感じます。西形先生とも少しお話しましたが、まさかこれほど背面がむちゃくちゃなことになっているとは思わなかったです。木造天守にするか、鉄筋コンクリートの天守を維持するか、いろいろな選択肢がある中で、どのみち天守台を活かしていかなければいけないですが。このありさまは、熊本城の大天守の裏よりもすさまじいものです。南海トラフを超えて、地震を想定したときに、もつのかという恐ろしさを感じたくらいです。危うい状況での密度調査を、やっておく必要はないかという。名古屋城のオリジナルの裏栗の堅牢性の証明のための密度調査ではなくて、今のダメージを受けてめちゃくちゃになっているものを、大丈夫かという数値的なものを把握するための密度調査をやっておく必要はないだろうか。それを検討してもらいたいです。なおかつ、これは後々のことなんですけど、どんなかたちにしても、このままおいておいたら危ない状況ですから。いらなくなった築石を叩き込んである砂という、栗の層の体裁でないものがあつた。何らかの近代工法を含めての耐久度回復、補強と言う部分を設計の中で考えなければならぬ。そこも意識したうえで、これから進めないといけないと思います。木造復元とか、そういうものはおいておいて、現状の大天守が、これでは危ないと思います。</p> <p>最後に、埋め戻しのところで説明された、4 ページの最後にありますけども。名古屋城の場合、石垣の前のトレンチ調査での埋め戻しでは、補強のための割石が使われていますが。ここに関してはやり方を石工さんとお話して、検討していただきたいと思いました。特に今、石列が出ているところのトレンチの①、下に残っている石列に、石列というか石垣の根石列だと思えます。これに傷がつく可能性があるため、モルタルの部分を撤去して、穴が取れているような状態なんでしょう。あそこの部分に手詰めで入れてやって、前から流し込んで叩きこむような方法よりも、図のトレンチ①番、ここの部分に流し込むのではなくて、手詰めでもって板状の石でもいいですから、顎をしっかりと支えてあげるかたちで、補強策をとってもらったほうがいいのかと思います。守るべきものは、ここらへんを守るべきで、こっちのほうは近代のものでありますから、十分意識してもらいたいのはここの保全ですから、ここに傷がつかないようにかたちで。これ本体を整えるのであれば、別の方法があると思います。気をつかうべきはここと、これが危ないので。やり方を、今までとは違つかたちで下を押さえる。ここらへんを相談されたほうがいいのかと思います。</p>
事務局	承知しました。
北垣座長	<p>このあたりは、図3をご覧ください。砂質土といえますか。裏栗がなくて、砂地に近いようなものが混在しているというか。ほとんど一緒くたになっています。それだけにここの、手当というものを、しっかりやっていただく必要があります。そのあたり、西形先生ともよくよく相談していただいて、あとでこれはやらないとまずいなということにならないように、十二分に検討していただく必要があると思</p>

	<p>います。</p> <p>ほかには、いろいろな、測量の経緯ですか。そういうのは生きているのですか。</p>
宮武構成員	<p>モニタリングの位置。どうでしょうね。モニタリングの対象になるのは、昭和に積んだ石垣ですから。守るべきは下のところですから。</p>
北垣座長	<p>そうですね。</p>
宮武構成員	<p>もう一回整理ですけど。守るべきは、こっちを優先して、しっかりこれを残してもらおう。全体を補強したがために、これが傷んでしまったら何もならないので。その発想で、変えたほうがいいと思います。モニタリングも、これをモニタリングしていくのか。そこはまた、検討の余地があるかなと思います。</p> <p>いずれにせよ、従来のようなトレンチの埋め戻しとはちょっと変えてやる必要があると思います。検討をお願いします。</p>
事務局	<p>石列のほう、検討します。</p>
北垣座長	<p>ほかに、ご意見はありますか。この件に関して。</p> <p>だいたい、いくつかご意見をいただいていますけど。これから、西形委員と相談していただいて、効果的な対策が今回は必要だと思います。よろしく、ご検討ください。</p>
事務局	<p>ありがとうございます。</p>
北垣座長	<p>ほかに、ご意見ありますか。この件に関して。はい、ありがとうございました。</p> <p>では、本日の議題について、十分意見が出尽くしたかはわかりませんが、非常に大事なご意見をいただいているので、このあたりを全体整備検討会議にご報告していただく、ということでお願いしたいと思います。よろしくをお願いします。</p> <p>最初、だいたい3時で休憩をとということでしたので、休憩をとらせていただきます。</p>
事務局	<p>それでは、10分ほど休憩をいたします。</p>
	<p>— 休憩 —</p>
	<p>6 報告</p> <p>(1) 本丸搦手馬出周辺石垣の修復について</p>
北垣座長	<p>時間がきたようなので、再開したいと思います。</p> <p>それでは、事務局からご説明をお願いしたいと思います。</p>

事務局	<p>ここから先、2題ご報告したいと思います。よろしくお願ひします。報告の1つ目です。搦手馬出周辺石垣の修復について、事務局よりご報告します。</p>
事務局	<p>今回は、今年度行った名古屋城本丸境門跡周辺発掘調査の成果をご報告します。</p> <p>調査の目的は、石垣の修復に伴って計画している本丸搦手馬出の平面修景に先立って、境門の痕跡および境門跡に現在設置されている石積み、環状の石積みが、写真1の左側の木が生えているところにあります。この石積みと地下遺構の関係を確認すること。もう1つ、本丸搦手馬出周辺石垣積み直し基本計画で、排水計画を提示しています。そのメインの排水が内堀に開口した石樋に、写真で見るとこの枡からつながっている石樋ですが、排水が機能しているかを確認することです。写真1と写真2に調査区の全景を載せています。</p> <p>まず、調査成果として、基本層序からご説明します。今回、赤い四角の中を、花壇のほうから見た写真を下に載せています。現地直下に、近現代の造成土がかなり堆積していました。盛土の厚さを調べるために、石垣に影響を与えない箇所として赤い四角内、近世盛土の断ち割りを行いました。1mほど掘削しても地山に至らなかったため、掘削を中止しましたが、盛土は北東へ傾斜するように、斜めに傾斜するように造成されていました。</p> <p>次に、土中石垣について、ご説明します。写真2の赤線部の部分に石垣が詰まっています。角石としては、写真4の赤四角内の石とみられます。暗渠の掘方の上に乗っているため、原位置ではない可能性が高いと思っています。角石の北には、築石大石材を含む3石が積まれていました。写真4です。この前に3石ありましたが、一番下の石材は、ほかの築石と比較すると矢穴が小さいので、同時期の石材ではないと思っています。積み方が不安定なので、土中石垣構築期よりもあとになって入れられた石材と思っています。東面側については、検出された石材が最下段と思っていますが、北面石よりも最下段の石材、写真5にあります。この一番下の石材と比べると、だいぶ高いところに設置されています。現代の花壇状石積みについて、東面では今の石積みの前に積み石がきていますが、北面では土中石垣に擦りつけて積まれているように見えました。写真5の石垣は、石材間に埋まっていた土から検出された遺物が、近代以降の陶磁器を含んでいますので、大部分が現代の花壇状石積み設置時に積み直しされたものと思っています。ただし、写真5の赤い四角内の3石については、上の石よりもだいぶ前に飛び出して積まれており、面が揃っていないこともあり、花壇状石積みには先行するものの可能性があると思っています。写真6は、写真4の東面の石垣の一番南側の花壇状石積みにあたる部分になります。堆積土についてブロック状の高まりがみられました。この部分で花壇状石積みと土中石垣がぶつかることから、土中石垣の築石が抜き取られた痕跡の可能性があるとと思っています。</p> <p>続いて、暗渠についてです。既調査で確認されていた内堀に吐出口をもつ暗渠を再検出しました。暗渠の集水柵は土中石垣の隅角部から東に2石目の石材、これですね。これを側面の石として利用しており、土中石垣とは軸が異なるかたち、土中石垣に対して、少し北に振れているようなかたちで暗渠が造成されていました。また、写真8のお</p>

	<p>り、雨水枡に直接、この暗渠が、現代とみられる枡に直接擦りついている状況が確認できました。雨水枡から土管に伸びているところですが、この土管が赤矢印の向きに傾斜していることがわかりました。直接水を集めて、石垣の内堀に排水をするんですけど、またそこから別のルートで排水を行っているようにみられました。暗渠の掘方内から番線を確認したこと、暗渠の掘方が後述する1号遺構を切っていることから、近現代のものと考えています。</p> <p>その1号遺構についてです。土中石垣北面すぐ北、写真7でいうと緑色の四角内です。幅1m×深さ0.8mほどの瓦溜りを検出しました。近代の陶磁器を含む固く締まった層が、瓦溜りの上にすぐ乗っていました。含まれる瓦は、平瓦、丸瓦が主でしたが、現時点で確認した範囲では、棧瓦は含んでいませんでした。わずかに確認した軒平瓦の文様は17世紀代のものである可能性が高いと思っています。</p> <p>次に、2号遺構です。写真7の青い四角の中です。花壇状石積みのすぐ北から、東西に並ぶ瓦列を確認しました。瓦の向きが、東西並んでいるところから縦に並ぶように向きが変わっています。そのような形になることから、この瓦を側面とした雨落ちである可能性が考えられます。西側については、近現代の攪乱によって切られていました。</p> <p>今回の調査の考察ですが、土中石垣については、位置的にみて境門跡に関連する石垣である可能性が高いと考えています。しかし、原位置をとどめているかについては、検討が必要と思っています。図1は、金城温古録の搦手外馬出大体ですが、赤い四角あたりで境門跡に関連する石垣があると考えています。北面に対して東面は、最下段の石の標高が高いこともあるので、慎重に取り扱う必要があると思っています。1号遺構については、含まれる遺物がほぼ瓦のみである点や、近代遺物を含む層がすぐ上に乗っていることから、構造物を廃絶した際に一括で瓦が廃棄されたものの可能性があるとと思っています。1号遺構の位置は、金城温古録を参照すると、門があった位置に近いと思っています。確認できたわずかな軒平瓦の文様が17世紀代にさかのぼることから、門廃絶後に門に葺かれていた瓦を礎石、もしくは柱を抜き取った穴に廃棄したものの可能性があるとと思っています。</p> <p>2号遺構については、検出された標高が、ほかで確認されている近世盛土の標高よりも高いところにあるという疑問点がありますが、雨落ち状の瓦列として整理したいと思っています。位置的には、金城温古録で塀と記述されている場所のすぐ北側で検出されているので、塀の雨落ち溝である可能性を考えています。</p> <p>今回の調査成果については以上です。</p>
北垣座長	<p>ありがとうございました。難しい検討が、まだまだこれからも続くことでしょう。事務局からの報告について、ご意見がありましたら、お願いしたいと思います。</p>
梶原構成員	<p>見に行けなくて、すいませんでした。直接見せていただけたらよかったんですけども。質問させていただきます。</p> <p>まず気になるのが、1号遺構と2号遺構で、写真9を見せてください。これが近世の石垣で、ここの面が近世面ですね。それを掘り込んで、柱などがあって、柱を抜き取った跡に瓦を埋めたという理解ですよね。</p>

事務局	はい。
梶原構成員	わかりました。2号遺構は、このあたりが近世の石垣と、花壇の石垣の境目という理解でいいですか。
事務局	ここから上は、今の花壇の石積みです。下が少し、石が小さいですけども。
梶原構成員	ちょっと微妙だなと思ったんですけども。全体図を見せてください。
事務局	写真2です。
梶原構成員	この3石が、明らかに近世なんですよ。この上がそうなんですよ。さっき見ているのが、ここですよ。このあたりがどうなっているかわからないですけど。このあたりから近世の石垣が、こう上がって行って、これがだめで、ここまでがよくなって、という、そういう理解ですか。
事務局	はい、そのつもりです。
梶原構成員	一応辻褄はあっているのかな、とは思いますが。ちょっと、このあたりの細かいところが気になったところではあります。わかりました。
宮武構成員	この映像で、質問させてください。今の梶原先生のご指摘を引き継ぐかたちになりますが、地形傾斜自体が、こっちに向かって上がっている。少なくとも、石垣の根石の方向としては、こことここを結ぶからこうなるということでしょう。手前の生活面にあたるところは、それについていっているの、ついていないの。
事務局	このあたりが固く締まった、おそらく江戸時代の道か何かの面です。これがちょっと高いです。
宮武構成員	どれくらい高いですか。
事務局	ちょっと。
宮武構成員	高いは高いということですね。1号遺構は、これの中でどこですか。
事務局	1号遺構はこれですね。
宮武構成員	手前。1号遺構の高さと、向うの花壇状のものは、検出面は一緒ですか。
事務局	検出面は、だいぶこちらのほうが高いです。

宮武構成員	<p>どちらですか。こっちが高い。こっち側が低い。</p> <p>もしかしたらですけど、馬出の中に入っていく方向は、フラットでないはずですよ。上がっていくのが普通です。今でこそわかりませんが、かつてこういうところに石段があったり、ほかの城郭の遺構で見ていると、入り口の導入がスロープになっているところもあります。今はフラットのような状況ですけど、ある一定時期の設計の過程では、導入するために上がることが絶対ないとはいえないです。そこはもう少し、丁寧に検出された遺構面のレベルを拾って。さすがに修景のときに、それは残念ながら復元できないと思います。まわりとの擦りつけがきかないから。ただ考古学的に、ある一定時期にもととの馬出の入り口のオリジナルというのは、左右から、普通は片方だけです、両方から上って上がっていくかたちをとる可能性があります。石垣がそれについていっているのは、理屈的にはおかしくないかもしれません。</p> <p>さらにこっちの手前を、わかりませんよ。これを見た記憶がないので。1号遺構も、引き抜いた跡に入れていると決めつけなくてもいいのではないのですか。つまり、礎石が門の足であれば、いわゆる下の目地ですよ。沈み留めのために、1回大きく穴を掘って、クラッシャーなどで固めた上に土台石を置きますから。ひよっとしたら、土台石を撤去しただけの話かもしれないですけど。写真9を見せてください。気になったのが、ここの玉砂利、これはなんですか。ここだけにあるのですか。</p>
事務局	これは確か、ここの前にもありました。
宮武構成員	左右は。
事務局	左右はなかったと記憶しています。
宮武構成員	そのあとだしたときに、目玉焼きみたいに、ここの部分だけ玉砂利が溜まっていたんですか。
事務局	そうですね。この一部分に玉砂利がありました。
宮武構成員	まわりは玉砂利がでていないんですよ。
事務局	でていないですね。
宮武構成員	<p>ちょっと意図があると思います。まわりから、普通飛んで、いろいろなところから砂利が混じっているのだったらわかりますが、ここだけにボンとあるというのは、何かの意図なので。もう1回そこは、調査の結果や、傾向を見直してもらって。引き抜いた跡に叩き込んでいるのであれば、こういう形状は出てこないだろうし。上にある礎石自体のデータとして何かあるのかなと思ったりしたので。そこはもう1回、選択肢としてそれも考えて、検討してもらいたいと思います。</p> <p>最後に、今日は千田先生が来ていないのでよかったんですけど。千田先生が来ていたら、怒っていたと思います。平面図を出さないよ。</p>

	<p>考古学的な検証をするのであれば、金城温古録の図面などでやるのは当たり前なんだけど、遺構平面図、配置図がなしの状態、写真だけではわかりません。いろはの、いですから、これは。最低でも、この中に全体の調査区と、主だった遺構配置図があって、それに、それぞれの遺構の番号がついていて、というかたちのスケールをあわせてやらないと、これが本当に柱の穴なのかどうか確認できないですよ。これは基本ですから、気を付けてください。</p> <p>最後ですけれども、暗渠は整備の対象からすると、あんまり考えないほうがよさそうですね。番線がでてきた。江戸期の柱に関わるものは断ち切っている。石垣の方向性とは違い向きに走っているとすると、層序的にも、レベル的にも、これは表土などに近い部分にあたる。これは、名古屋城の遺構として修景整備するには、ちょっと難があるという結論をはっきりだしておけば、整備のほうに反映しなくていいですからね。今度そうなってくると、間違いなく、ほぼ柱の跡であるという部分がみえてくるのであれば、これ自体一つプレミアムがついたというかね。将来修景するとき、門の位置を表示してやる方法がとれるか。バリエーションも増えますから。そこらへんをこだわって再検討してもらったら、使えると思います。お願いします。</p>
北垣座長	<p>大変貴重なご意見を、ありがとうございます。ほかに、ありますか。今のお話の中にもありました、平面図ですね。これは本当につけてもらったほうがいいですね。次回は、よろしくお願いします。</p> <p>そうすると、この件に関しては、だいたいご意見をいただいたように思います。</p>
事務局	ありがとうございます。
	(2) 西之丸蔵跡追加調査について
事務局	<p>それでは、2つ目の報告として、西之丸の蔵の跡の発掘調査が終わりましたので、調査報告をさせていただきます。</p> <p>これまで、一番御蔵、二番御蔵、五番御蔵、六番御蔵等の位置や構造を把握するために、今年の2月から約6か月間かけて発掘調査を実施してきました。調査は、石垣・埋蔵文化財部会および全体整備検討会議の先生方に、現地やメール等でご指導、ご意見をいただきながら進めてきました。この場を借りて、お礼を申し上げます。</p> <p>発掘調査の結果の概要については、資料4の1ページの冒頭にお示ししています。六番御蔵については、調査により位置や構造が確認できました。一番御蔵については、一部で礎石の位置等を示す痕跡を確認できたため、絵図情報とあわせると、位置の推定が可能になると思います。二番御蔵、五番御蔵については、発掘調査では位置が確認できるような遺構については確認できませんでした。それでは各蔵ごとに、具体的にご説明します。</p> <p>六番御蔵についてです。資料3ページをご覧ください。左下の写真2-3にあるように、南側で地覆石の列を検出したことや、礎石の抜き取り痕跡を確認できたことにより、蔵の位置や規模が確認できました。図2-1、まん中のオルソ図にあるように、礎石は母屋の周囲に、1間6尺間隔で配置されていたと考えられます。その内部は、南北4間ず</p>

つに配置されており、全体でみると5つの空間に分かれているようになります。右上に金城温古録の図面を載せています。ここには戸前が5つ描かれているので、5つの空間にそれぞれ戸前がついていたと考えられます。また、母屋の西側には、写真2-1のように円礫が南北方向に2、3m間隔で並んでいる状態が確認できました。これは庇を支える礎石の下にあった根固めの石と考えています。礎石自体はありませんでしたが、この位置から庇の柱の位置を推定できます。さらに東側では、建物の外側に素掘りの溝がありました。蔵に伴う雨落ち溝の可能性が考えられる遺構を確認しています。西側では、近代においても水路として利用されていたため、雨落ち溝は確認していませんが、近代の水路として使用されているときの水路を確認しました。さらに近代水路の西側では、近代のものと推定される瓦を立て並べたようなものも検出しています。

次に一番御蔵についてです。資料4の4ページをご覧ください。東側からA区、B区、C区の3か所の調査区を設定しました。A区の西端の北側とB区の南側で、礎石の抜き取り痕跡を確認しました。1間の間隔は六番御蔵よりも広く、6尺5寸であることが分かっています。その間隔から一番御蔵の位置を復元したものが、右下の図3-4になります。北側、南側、西側の礎石や抜き取り痕跡は確認できませんでした。検出した抜き取り痕跡から推定される蔵の北東の端を起点にし、金城温古録や本丸御深井丸図の絵図などに記載されている大きさや柱間から復元しています。一番御蔵の南側には、近代の倉庫として転用された際に造られたみられる水路が、蔵の西側には、このあとご説明しますが、近世の水路、水道が検出されています。復元した一番御蔵は、周囲を巡る水路の中にちょうど収まることから、こうした復元案が妥当なのではないかと考えています。B区の北側では、建物の戸前入口に付随すると考えられる瓦が敷き詰められたような遺構が確認されました。ただし、戸前の柱と礎石の高さの関係から、戸前が造られた当初のものではなくて、後に造られたものと推定しています。右上に絵図を3つ並べていますが、まん中の金蔵温古録には六番御蔵の南東端から一番御蔵の北側までの距離が書かれています。この数値と、実際の発掘調査で検出した建物端の距離を計測してみると、非常に近似していることがわかります。このことから、金城温古録に書かれている数値の正確性がみてとれるのではないかと思います。

続いて、二番御蔵について資料4の5ページをご覧ください。二番御蔵では、C、D、E、Fの調査区を設定して調査してきました。近代の建物跡や、現代の攪乱が大きいことがわかりました。一部深掘りなどして、さらに深い箇所近世の遺構がないか確認しましたが、蔵跡に関する情報は得られませんでした。ただし、図4-1に載せているC区の中央あたりに、南北方向の伸びる石組の水路を確認しました。この水路は、積み直されたり、拡張されたりしていますが、もともとは金城温古録に記載のある水道と推定されます。水は、この水道を流れて北側のほうへ流れ、北側の石垣から外掘へ排出されたと考えられます。この位置を確認するために設定したJ区という調査区がありますが、こちらからは近代の建物の基礎が、水道と想定される深いところまで入っており、位置は確認できませんでした。C区で見つかった水道のすぐ西側には、図で赤い丸で示した部分に礎石の抜き取り、または根固めの可能性がある遺構が見つかっています。その位置から推定する

	<p>と、一番御蔵と二番御蔵の間に構えられていた、御蔵御門の東側の鏡柱、控柱の礎石位置の可能性が考えられます。</p> <p>最後に、資料4の6ページの左側をご覧ください。五番御蔵の調査のために、G区、H区の2か所の調査区を設定しました。近代の建物基礎を確認したため、深掘りして下に近世の遺構がないか調査しましたが、建物や庇の礎石の抜き取り痕、雨落ち溝など、蔵跡に関する情報は得られませんでした。</p> <p>発掘調査の報告は、以上です。今後は、調査成果を基に絵図などの情報を用いながら整備の方向を検討していきたいと思います。</p>
北垣座長	いろいろわかってきたことがありますけど。ご意見等ありましたらお願いします。
宮武構成員	早計かもしれないですけど。次の整備、修景をターゲットにしたうえで、示せる遺構と、示すべきではない時代の違う遺構があり、そういうものの判別をしていかなければいけないと思いますけど。ちょっとまだ頭の中の整理ができていないんですけど。3ページの六番御蔵の中の興味深いのは、写真2の、この関係です。大変複雑ですけども、建物本体、母屋に沿って三和土、瓦敷、盛土という3種類の列状をなす構造物というか。これが相互にあるんですか。
事務局	これらの遺構は、瓦が地中に入っていますが、瓦の掘方はなくて、瓦を立てながら周囲に、西側は三和土や土、東側は瓦の碎片を含んだ盛土で押さえながら遺構を造っていると判断しています。一連の遺構と考えています。
宮武構成員	手順としては、これを並べて左右で挟むということですか。
事務局	そうです。
宮武構成員	こっちが蔵の外なんですね。こっちが蔵の中側ですね。
事務局	そうです。そのすぐ右側に近代の水路が走っています。
宮武構成員	これは盛土と称している、瓦の碎片を含む層を切っているわけですね。
事務局	切っているわけではなくて、水路時代のほぼ同時期ではないかと考えています。
宮武構成員	となると、これの一連は近代水路と同じ時期になるのですか。
事務局	細かい時期はわかりませんが、その遺構自体に煉瓦等も使用していますので、全体として近代の遺構であると考えています。その細かい時期を、これが何であるか確認するために拡張もし、遺構の大きさや造り方はわかりましたが、具体的にこれがどういう遺構なのかというのは、今後類例などを調べていかないとわかりません。

宮武構成員	簡単にいうと、名古屋城の建物ではない可能性があるということですね。これを修景整備するかとなると、よほど分析されないと納得いかないですね。
事務局	そうですね。
宮武構成員	気になっているのは、この建物だけが6尺3寸なんです。柱間が。ほかは6尺5寸ですけど。3ページの下の写真を見せてください。もともと地覆石をなくした云々から始まったことですけども。よく見ると、地覆石を置くために、こんなに幅広い布堀をすることは考えられないので。布堀はもともと前からあって、地覆石を並べるために掘った掘方もでています。地覆石と、布堀で支えていた建物の関係は一致しないですね。
事務局	地覆石とは、厳密には一致しないですね。礎石自体は、掘方がないので、布掘りをしたときに礎石と一緒に据えていると考えています。
宮武構成員	最初は布堀と礎石だけで建っている建築物である、蔵として、そのあと地覆が足されているという、順番でいえばね。
事務局	あるいは、もともと何かしら別の地覆などがあつたところを、そのまま入れたりとか。今の検出している面が、当時の構築した面とは、削られている可能性があります。断定はできませんが、もともと別の地覆石があつて、それが取り外されて、検出された地覆石に変わっているということも考えられます。今写真に写っている礎石は当初から、地覆はあとから入れられたというのは、遺構の切り合いから判断できるかと思います。
宮武構成員	最後まで六番御蔵は、どこを表示すべきかというのは、まだ検討しなければならなところがあります。 それと同じような主旨ですが、5ページの二番御蔵です。写真全体を見せてください。まん中の赤い丸、金城温古録に書かれている蔵と蔵の間の開口部を出入りする機能、門が、それに関わる、鏡柱がありますけども。これを見ていると柱間、6尺5寸で、2mくらいですか。中心で。
事務局	これで2mほどです。
宮武構成員	6尺5寸、1間の2mでいくと、緑色は、そのあとの近代建物の基礎の抜き取りだろうというかたちですね。軸線に乗っているんですよ、不思議と。しかも6尺5寸の柱間を保っているんですよ。
事務局	緑の芯々は、ちょっと違って6尺だと思っています。
宮武構成員	南北だけの話ですね。
事務局	そうですね。東西が3間

宮武構成員	6尺でもっての3間。
事務局	それも含めて新しいものだと考えています。
宮武構成員	この図面で見ると、パッと見同じ、6尺5寸で割れる。2間半の、本体に乗せるので。それにしても乗っていますよね。たぶん。間柱が違うから、そうなんでしょうけど。上手いこといけば、旧近世期の建築物の建ち位置に、それをそのまま踏襲するようなかたちで近代期に何か攪乱しているという痕跡が重複しているのであれば、それはむしろ活かしてやったほうが、おいしいと思ったわけですけども。明らかに違うのですか。
事務局	そうですね。緑色の右側の、東側のほうは、一番御蔵の建っていた場所に建てられたと推定しています。一番御蔵が廃棄された後に建てられていると思います。
宮武構成員	わかりました。
北垣座長	ありがとうございました。ほかに先生方、ありますか。
梶原構成員	いくつかお伺いしたいです。まず六番御蔵ですが、母屋と庇の柱の位置が全然違うのが気になります。ほかにも事例があるということですか。こういう事例が。庇が、全然ずれているので、これだけ見たら同時期のものかどうかわからないですけども。
事務局	以前、全体整備検討会議で、建築の先生から伺った意見として、庇の柱間隔のほうが広いことが多いので、そういう意味では合致していると思っています。
梶原構成員	わかりました。ありがとうございます。それともう一つ、先ほどご指摘のあった瓦敷遺構です。これが近代というのは、全然 OK ですけど。先ほどのご説明で、全体を広く掘り込んでまん中に瓦敷を敷いて、両側が三和土と盛土で押さえたという理解ですけども、一番御蔵のほうでも戸前の前で瓦敷がでていますが、これとは工法が違うことになるのですか。
事務局	はい、そうです。
梶原構成員	一番御蔵で三和土が使われていますが、この三和土は、ちょっと現場で見えないとわからないですけど、一番御蔵の戸前はいつからあったのですか。近世からですか。
事務局	近世からで、それは金城温古録に、4 ページの右上の絵図に描かれていますので、近世と考えています。
梶原構成員	近世からあって、瓦の列がそこにあるから近代にも戸前はあったということですよ。この瓦は古いのですか。

事務局	この瓦自体は、棧瓦などが入っていますが、時期は特定できません。
梶原構成員	その瓦敷があったあと、図3に紫のラインがあるので、何らかの段階で戸前が外されて、外側に近代の、ここに三和土がある水路がよくわからないですけど、それがまわっているという理解ですか。
事務局	そうです。素掘りの溝のようなものがめぐっています。
梶原構成員	それは近代のものですか。
事務局	近代のもので、右の図でいえば、下の倉庫と書かれているまわりに青色の線で書かれているものだと考えています。
梶原構成員	線があるので、戸前が外されたということですね。わかりました。一番御蔵で使われている三和土と、六番御蔵で使われている三和土というのは、年代も使い方もまったく違うという理解でいいですか。
事務局	今回の発掘調査で見ついている三和土は、明確のものは近代にしかないものではないかと。六番御蔵で見ついている三和土は、礎石の抜き取り痕跡を埋めているような方法で使われており、それ自体も近代のものではないかと考えています。一番御蔵も同様の痕跡がありますので、同じようなタイプ、大正4年ちょっと前くらいに取り壊したときに、礎石は使えるものは外そうということで一番御蔵、六番御蔵の礎石を外して、そこに三和土埋めたのではないかと。
梶原構成員	六番御蔵と一番御蔵の瓦敷は、パッと見同じように見えるけど、順番としては、年代としては全然違う時代の造作の可能性があるということですか。
事務局	六番御蔵の瓦敷は、棧瓦が入っていて瓦の厚みも厚く、新しい印象を受けます。それだけでは決められないですけど、受けます。
梶原構成員	わかりました。ありがとうございます。
宮武構成員	もう1回確認ですけど、六番御蔵はの中で最後にできたんですよね。
事務局	最後です。
宮武構成員	今梶原先生のご質問を聞きながら、おやっと思ったんですけど。こちらの戸前は、柱があったんですよね。一番御蔵のほうは、上の本丸御深井丸図に描かれている蔵自体の柱立ちイメージを見ても、この場合は、主張はあっているんですよね。提示されているピンクで見ても、それはだいたい一緒だと。
事務局	はい。

宮武構成員	ところが、戸前の部分だけ拾っても、母屋の前はあわないと。しかも6尺3寸と6尺5寸という基本的な柱間の違いもあると。一緒に扱って大丈夫かなと、心配になってくるんですけど。
事務局	六番御蔵については、資料の3ページのオルソ図をご覧ください。ここに5つの空間があり、それぞれその中に戸前が付いていると考えています。その1つは4間あり、その両端を外すと、間の2間のうちのどちらかに戸前があったと考えています。その戸前を開けるように、庇を広くとらなければいけないのではないかと考えています。それを優先するために、庇の間隔はイレギュラーの部分がでてしまうのかなと考えています。
宮武構成員	ということは、先行して本体である母屋のほうが成立していて、あとでくる戸前や庇を付けたとき、まずくなっちゃったからこうなってしまったという可能性はあるのですか。
事務局	あるかもしれないです。現地作業とか、そういうところがあるのかなとは思いますが。
宮武構成員	六番御蔵を構成している、それぞれの遺構が全部揃って、修景の中で取り扱っていいのかどうか、非常に心配です。あまりにもほかの蔵と規格が違い過ぎるので。まだ、これから検討するというということですよね。ここは。
事務局	これで調査の結果が、ほぼ出揃いましたので、これを基に表現の仕方は、全体整備検討会議のほうになってきますけど、諮っていきたいと思います。
宮武構成員	全部ですか。
事務局	どこまでをですか、ということについては、今回で言えば六番御蔵で見つかった情報は一番多くて、一番具体的な情報が得られています。次が一番御蔵。ここまでは一定の位置情報については、かなりわかってきています。二番、五番御蔵については、位置情報すら得られていないということです。そのへんを勘案して、全部を同じ表現をしてはいけないので、それぞれの条件にあわせて表現をしていきたいと思っています。
赤羽副座長	原則的な話ですけど、今、お話されましたけども。発掘調査というのは、現地の発掘調査が終わったから終わったのではないです。今は、現地の調査が終わった段階ですよ。これからまた苦労して、報告書を作成するわけです。名古屋城も含めて、名古屋市は報告書の作成を少しないがしろにされている感があるので。報告書の作成をもって、発掘調査を終了するという認識を、ぜひもっていただきたいです。その間に、調査の所見と修景などを混雑させてはいけないと思います。調査は調査、そのうえで修景ということを考えていく。何を取捨選択するのか。どれを取り上げていくのか。西之丸でも、かなり年代差が

	あるわけですね。遺構によって。それをどう整合させるのか。あるいは整合できない場合は、どう説明するのか。これは修景の計画を練る段階で周知していかなければいけないと思います。発掘調査と成果を共有する手段を、さまざまな専門家の方がいらっしゃるわけですから、その方たちの知恵も集めてやっていただくと。とにかく、今日のような発掘調査の成果の報告をもって、これで次の修景だというような、拙速な姿勢をとらないようにお願いしたいです。
事務局	ありがとうございます。言われるとおりの、調査としては現場が終わったから終了ということではなくて、きちんと報告書を作成し、そこまでが調査だと考えています。一方で、これから整備は並行して進めていくわけですが、ほかの事業でも、今までと同じでしたけど、学術的な調査研究というのはここで終りではなくて、調査のあとも継続していくものだと考えています。この先は、調査結果と、学術的な研究と、整備をすべて並行して行っていきたいと考えています。
北垣座長	赤羽先生、それでよろしいですか。今の事務局からの。
赤羽副座長	はい。
北垣座長	これは、非常に大事なところですよ。調査がすんだというのは、現状としては終わったことなんですけど、検討をしっかりとっておかないといけないです。このところがおろそかになったら、どれだけでもしようがないです。それなりの、きちんとした、赤羽先生がいわれたようなことを、しっかり押さえていかないと、報告書をどンドン作ったからいい、という話では絶対ないですからね。
事務局	調査は、確かに現地が終わったところですよ。考古学的な遺構のところは調査でわかりましたけど、建物のところまで、やりながら理解するのは難しかったところがあります。今後は、建物としてどういうものかということも含めて検討し、報告書を作成したいと思っています。そういった成果を整備にもフィードバックしながら、よりよい整備をめざしていくことかと思っています。
北垣座長	いかがですか。今事務局から、現状としては、こういう考え方で臨んでいきたいことです。繰り返すようなんですけど、これで調査が終了した、ということで、終わってしまったということではないですからね。これも、このあと全体整備検討会議にだされるわけですよ。それはそれで、だされたらいいわけなんですけど、それで終了ではないということです。発掘で、非常に一生懸命、担当者はがんばってやられているわけなんですけど。さらに、まだまだそれぞれのところで、わかりにくい問題が残されているということも事実ですから。慎重に進めていただきたいと思います。 ほかに、ありますか。
宮武構成員	今のお話を聞いて、ちょっと不安なのが、全体整備検討会議にかけるということは、石垣・埋蔵文化財部会でだした結論について挙がっ

	<p>ていくわけです。それに基づいて、これから全体整備計画の中で見直しを図って、どういう修景にしていくか、ということですから。まずはこの部会として、結論をだすべきだと思います。その結論の方向性としては、これから発掘調査のデータに基づいて報告書を作成していく過程の中で検討していくのでしょうか。こちらとしてお話しすべきことは、少なくとも名古屋城の時代とは違う遺構が同居している実情を鑑みると、どれを修景として、どれをどういう時代として整理して表現していくのかということについて、より十分検討して計画立てをしていただきたいということはすべきだと思います。とりあえずでたから全部修景するというのではないですよ。さらに今の段階では、江戸期の遺構と軍部時代の遺構とが、両方同じように同居しているので、無意識にやっしまえば、間違っ明の遺構を表示しかねない部分がありますから。その仕分けは、引き続き十分やっていただきたい。ということだけは、今回確認したいと思います。</p>
北垣座長	<p>いろいろ経緯がありましたが、今宮武先生がお話されたあたりが、部会としての現状です。そこからはもう少し、上げたらそれで終わりではないですよ、ということです。</p>
事務局	<p>確認のまた確認になってしまいますけど。今、宮武先生がお話されたことは、遺構の評価として、今後整備をするにあたり江戸期のものと明治期以降のものをきちんと選別して、幕末の表示をするのであれば、きちんと江戸期のものを表示すべきだと、そういうご意見だと思っています。言われているのは、明治期以降かどうかの判断を、部会として何かしらのご意見をいただいたうえで、今後進めていくという意味ですか。</p>
宮武構成員	<p>それをするためには、先ほどご質問したことで、まだよくわからないという回答がクリアできないと、判断できないので。土間や瓦敷の盛土など、近代の水路と同じような時期に造られているものを全部明記するというふうに、ぶった切っちゃっていいかどうかという。そこらへんを、そちらの状況で判断いただいたデータを見ないと、なんとも言えないと思います。部会のほうで、これをいつの時代と結論付けましょうということまで、まったがかかると、まだ相当時間がかかると思います。</p> <p>注意していただきたいのは、明治は修景しない、江戸は修景するという話ではなくて、いずれにしても表示するのであれば、見学者が誤解を招かないように、これはいつの時代のもので、これはいつの時代のもので、というものがだせるところまで、全体整備検討会議の中で詰めていく。それよりさらに、もう少し石垣・埋蔵文化財部会の中で仕分けしてくれ、時代決定までやってくれ、というオファーがくれれば、それはまた考えなければいけません。</p>
事務局	<p>承知しました。全体整備検討会議のほうにもご相談し、今言われたようなことであれば、またお願いしたいと思います。また、ご報告いたします。ありがとうございます。</p>

北垣座長	<p>これで繰り返しませんけど、そういうことでよろしくお願ひします。 それでは、だいたいこれで、今だされているところについては、一応終わりましたね。では、お返しします。</p>
事務局	<p>本日、2つの議題と2つの報告について、熱心にご議論いただきありがとうございました。本日いただいた貴重なご意見については、今後の検討に活かしていきたいと考えています。 それでは以上をもちまして、本日の石垣・埋蔵文化財部会を終了いたします。長時間にわたりありがとうございました。</p>